

補足 ダイス機能の実装

文中に紹介したJavascript標準組み込みオブジェクトMathを使ってダイス機能を下記のように実装できます。

```
//ālea iacta est
function dice(num = 1, side = 6) {
  return Array.from({ length: num }).map(e => Math.floor(Math.random() * side + 1))
}
```

引数はダイスの個数と面数です。デフォルト（無入力）で1個の6面ダイスが引数の値として与えられます。
下線部以外のコードはダイス個数分の結果を配列で返す仕組みで、とりあえずそのままコピーしても大丈夫です。
下線部のコードは計算方法です。（0以上1未満の乱数 × ダイスの面数） + 1 を小数点以下切り下げ処理します。

例えば6面ダイスの場合、

0以上1未満の乱数 × 6の結果は0以上6未満です。①

①の結果に1を足すと、結果が1以上7未満です。②

②の結果を小数点以下切り下げ処理すると、整数1,2,3,4,5,6となります。

> dice() //6面ダイス1個

< [3]

> dice(2,8) //8面ダイス2個

< [1,7]

> dice(10,20) //20面ダイス10個

< [14, 19, 13, 9, 17, 20, 2, 16, 1, 12]

実物の20面ダイスを作るのはけっこう手間がかかりそうですが、プログラムだと一行程度ですね。